

日本

ハンザキ研究所ニュース 2012(9) : 通巻 No. 81



発行2012年9月30日

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川292

Tel/Fax: 079-679-2939

E-mail: info@hanzaki.net

URL: http://www.hanzaki.net

NPO 法人 日本ハンザキ研究所 栃本 武良

黒主と卵

アンコ淵の主として、ここにある巣穴に6年間君臨している黒主ことNo.977は、8年前に少し上流で合流する支流の長野川で登録され、全長が1,000^{mm}、体重7.30^{kg}であった。6年前にアンコ淵に落ち着いてからは毎年1回捕獲して測定しているが990^{mm}という数値で全長は変化が無いが、体重の方は年々減少してきて4.70^{kg}までスリムになっている。この巣穴は繁殖巣穴としても毎年使われていて、黒主は繁殖巣穴の探索行動をしないまま“デンマスター”の役割を続けている。水深は少ない時で1.5^mだが、巣穴の奥行きが3.5^mはあるほぼストレートな穴だ。卵を確認するためのフックは多少の障害物があるものの根気よく出し入れしているとスルーして行く。こんな真っ黒な巣穴は珍しいので何とかカメラを入れて内部を観察したいと思っていた。それが今回、覗くことができたのです。



水中カメラに映った黒主と卵塊

須磨水族園の助成を受けて塩ビパイプの先に小型水中カメラと照明を付けたものを作成し、モニターで観察しながら巣穴に挿入した。岡田副理事長や水中カメラマンの下村会員たちが潜水し苦勞の末に黒主が卵塊を守っている様子を撮影することができたのです。大きな黒主の体に押しつぶされそうな卵塊が、常に体をゆすって動く主の働きによってユラユラフラフラと動いていました。この主の献身的な動きによって卵塊の内部まで新鮮な水が行き渡るのでしょう。産卵は9月14日と推定され10月17日に十分発生が進んだところでフッカーを入れて約300粒を引き出しました。この卵は水槽でポンプの水流を受けて揺れながら10月23日から孵化が始まり10月末までにほぼ孵化が終わりました。小型水中カメラで水槽の中の真っ黒な幼生たちのアップでシャープな映像を見ることができました。

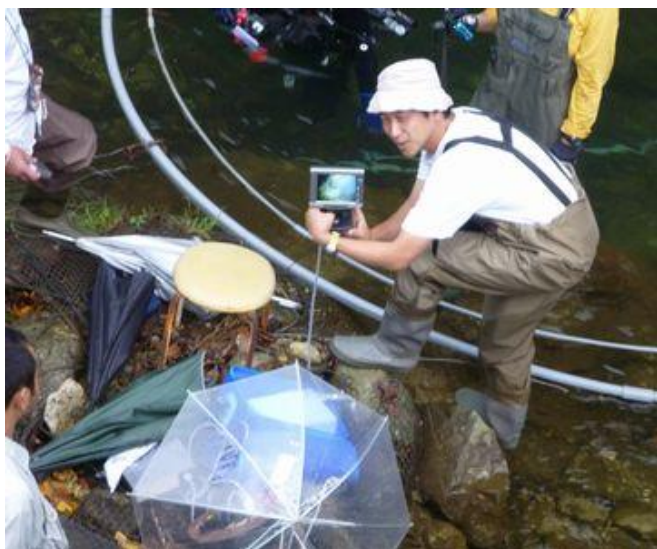


写真1 巣穴内のモニタリング



写真2 卵塊のフッキング



写真3 水槽内の幼生の撮影



写真4 小原さんと記念撮影 (2003年)



写真5 T's Favorite のハンザキグッズ



写真6 水面に顔を出すレプリカ



写真7 山岡先生力作のクッキー



写真8 萩焼き茶碗の底にハンザキ



写真9 チェーンソーアートでハンザキ出現



写真10 錦川支流宇佐川の大堰堤



写真11 宇佐川堰堤上流側の堆砂



写真12 天然記念物アオダイショウのアルビノ

小原（こばら）二郎 さんのこと

小原さんが亡くなられたという知らせがメールされてきた。10 年ほど前に広島市安佐動物公園で日本動物園水族館協会の総会が開かれた時に、何年かぶりでお元気なお顔に接することができた。オオサンショウウオの会を立ち上げるについて会長は小原さん以外には考えられなかったの、安佐動物公園における第 1 回の会で推薦させていただいた。小原元安佐動物公園初代園長は、東京や横浜の動物園で獣医として活動された後、広島市の動物園を 1971 年に設立されたのである。動物園が開園してからは、地方の博物館施設として何か地域の動物の研究をとということで“オオサンショウウオ” チームを立ち上げたのです。

オオサンショウウオは岐阜以西の本州などに生息することが知られているが、主生息地は中国山地の河川である。兵庫県や広島県にも多くの生息が知られているが、その生態はほとんど分っていないということで、この日本を代表する水生動物に注目された。その成果は動物園水族館雑誌に 5 篇の論文（1972～1981）として発表されており、どうぶつ社から 1985 年に刊行された“大山椒魚”に集約されている。小原さんたちの活躍で文化庁から委託を受けた日動水協は、府県ごとに大学や博物館なども含めたメンバーで調査を開始することになった。特別天然記念物の調査を始めるための取掛かり方も知らなかった私たちは、この機会に兵庫県における調査を始めることができたのだ。しかし、3 年間の受託調査が終わってみると、まだまだその生態に迫るには時間が足りないということが分かったので、報告は資料集という形で今後のオオサンショウウオの生態調査に参考になるようにした。1978 年のことで、以後、私は 35 年ほどの生態調査を継続させてきた。

小原さんの真骨頂は、広島市立の動物園を第三セクターに委託するという行政に立ち向かったことだろう。博物館施設がその役割を果たしていくには委託は好ましくないという信念のもとに反対の意を表明し署名活動も行ったのである。そのことは当時の朝日新聞天声人語にも紹介されており、我々も署名に応じたが、お上の力に押し切られてしまった。その結果 55 歳という若さで園長を退き“ハゲ二郎”と自称してマスコミや著作の世界で活躍されていた。安佐動物公園では、生態調査だけでなく地域との協働や啓発活動にも力を入れて博物館活動を実践されていたが、構内にオオサンショウウオの繁殖施設を作り飼育下での繁殖に長年に渡って成功していることは特筆されることだろう。オオサンショウウオの会の方は第 1 回のみ参加で、以後岐阜県郡上市、大分県宇佐市、三重県赤目、兵庫県朝来市、鳥取県南部町、岡山県真庭市、愛知県市瀬戸市と続き今年で 9 回目を山口県で開催され大変に有意義な会となって来た。第 2 回大会からは私が副会長・会長を務め、第 7 回からは安佐動物公園の副園長であった桑原一司博士が会長を務め小原さんの遺志をつぎオオサンショウウオの生態解明、河川工事などの環境悪化からの保護保全などについて多くの活動を繰り広げてきた。動物園の第一線から身をひかれて 30 年、突然の訃報であった。小原さんの志を引き継ぎ若い人へバトンタッチしていくことでその功績にお応えしたいと思っている。

日本オオサンショウウオの会・山口県岩国市錦町大会

第9回の大会が200名を超えて盛大に開催された。なにしろオスプレイ（猛禽類のミサゴ？）問題で揺れる最中の会なのに、山口県知事・県教育長・県議会議長そして岩国市長・市教育長・市議会議長さんと県と市の各3役の出席があって地元の盛り上がりは大変なものだった。また錦町を流れる錦帯橋で有名な錦川が本州最西端のハンザキ分布であることが高川学園の村田先生たちの努力で確認されたのである。基調講演も村田先生が高校生たちと調べた結果を報告された。ハンザキの調査は夜行性の動物なので夜の河川で行うことになり危険も伴い生徒たちの安全にも気を遣わねばならず、なかなか大変なのだ。ただ、地元の“錦川オオサンショウウオの会”のバックアップもあって、同会の事務局長の森田さんの山小屋や空き店舗を調査基地に使わせていただいているということであった。

発表演題は全部で16件あり休みなしでの熱演が続いた。年に1回の大会であるからハンザキに関係している者にとっては1年の総括として格好の発表の場になっている。年々のまとめをしておかないと大量のデータが溜まり混乱し腐ってしまい役に立たず、ただただハンザキをもてあそんでいくことに通ずると思う。ハンザキの調査研究発表だけでなく、河川環境や啓発活動などの事例の発表もあって、毎回大変に有意義な大会となっている。各地で開催を持ち回しているのは、地元の方々にとっては身近な存在のハンザキではあるが、「知っている」と言われるものの大きな体を見たことがあるというだけのことが多いのも事実だ。産卵は？（見るできない）、真っ黒な幼生の姿や外鰓を持った幼生、繁殖期におけるオス同士のバトル、成長や年齢、寿命などと共に食性もよく知られていない。

発表以外にもハンザキグッズ類の即売会もにぎやかだ。T's Favorite のリアルなグッズ類は垂涎ものだが、かなりの価格が付いている。また別のコーナーでは芸術家の大作が並んでいた。地元の会の顧問の山岡先生が一粒ずつゴマを使った画竜点睛？とばかりの力作のハンザキクッキーも並んでいた。お土産に頂いた萩焼きの茶碗は我がハンザキ研の民俗資料展示室に加えられた。宣伝の幟旗もいただいていたが、今までのものと並べて展示してみると幅も広くて赤と黄色と2本が目立っている。力の入れようの違っていたことが良く分る。チェーンソーアートもなかなか迫力があって、あつという間にハンザキが出現した。

第2日は、村田先生のフィールドにある大きな砂防堰堤を見学した。雨で緩んだ急斜面をロープにすがって下ったが、後日足腰が痛んだのは元気な皆さんに比べて情けない思いであった。日中にもかかわらず5～6匹のハンザキが高校生の手で捕獲されてきたが、皆背骨が浮き出るほどに痩せていて、後日緊急保護することになった。この砂防堰堤は満砂状態で浚渫が予定されているというが、真土のような細かい砂が流れる川ですぐに溜まってしまふ由であった。浚渫のたびに河川内生物が大きなダメージを受けることになるので、何とか堰堤にスリットや魚道を付けることができないかと思う。自然な流れに戻すには水と砂の循環を正常にするしかないと思う。その間に痩せたハンザキ達が人の管理下で速やかに回復することを願うところである。

今月の調査から

9月にはハンザキの繁殖期になる。アンコ淵の周辺は一枚岩であり普段は隠れ家がほとんど無いので、黒主が時々姿を見せるだけだ。それが8月半ばころから、日中でも他の個体が姿を見せるようになり、黒主もたびたび穴から出てきてパトロールに精を出すようになる。今年は、穴に黒主が入っても尾が見えたままのことが多く、かなり埋まっているようだったので代わりに人間がクリーニングすることにした。水中ポンプを使って水流を穴に向けるともうもうたる土煙りが出てくる。水深が身長ほどでも潜水しないと作業がやりにくいので若い人たちの作業には感謝するのみだ。日本工科専門学校生の野外実習も兼ねて実施してもらった。また、副理事長の岡田さんが水中カメラマンの福田幸広さんと共に電波発信機を付けたハンザキの繁殖期行動を追った。その解析はいずれ論文として発表されるので楽しみなことだ。

岡田さんたちは5日に5個体を計測、内2個体が新規登録(510^{ミリ}と680^{ミリ})、6日に電波発信機を付けた4個体が支流の長野川の巣穴周辺に集合していることをつきとめた。いずれもオス個体であり、この中のNo.694は今年の6月に2^キほど下流(14年間もここで繁殖期も含めて10回も測定)で確認していた個体であり、今回初めて上流域で確認したもので短時間にかかなりの遡上をしたことが分かった。さらにNo.1496も今年4月に下流2^キほどのほぼ同じ場所で確認されている。8日には卵が出かかっているメスを測定し、10日にも1個体、16日に4個体を計測している。

13日には田口会員たちが16個体を計測した。内1個体が全長745^{ミリ}で新規登録となっている。追跡期間も2か月から18年2か月の間にすべて含まれていた。岡田・田口両チームで合計31個体の再捕(内1死体)と履歴不明の死体1、新規登録3個体という成果であった。死体の1はオスで4年間の追跡で855^{ミリ}から900^{ミリ}と比較的良好な成長を示していたので残念なことであった。今回の調査で、1,555個体の登録となり、今年は7・8・9月と死体を収容したが、これまでに17個体の死亡を確認したことになる。そのうち6個体は繁殖期の首切り死体で内1はメスで他はオスである。マイクロチップの挿入は800個体程となったが、この中で30年以上の追跡個体が8、20以上~30年未満が12個体となっている。

.....

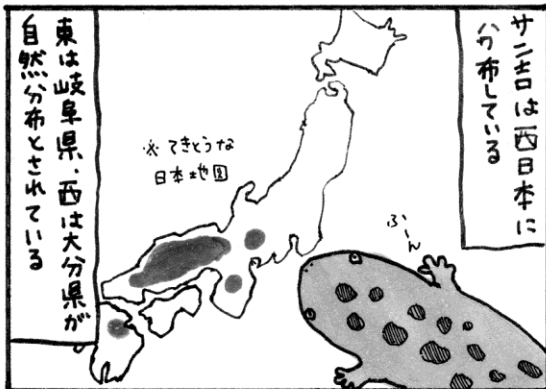
ハンザキ・グッズ・コレクション 10 兵庫県④

ハンザキ・クッキーは大好評です。普通のクッキーを作っていた銀谷工房の皆さんに“ハンザキ型”クッキーを作るようにそそのかしてから4年になります。生野は紅茶の生産地であり茶っ葉をもんだ時の粉をクッキーの生地混ぜて作ります。今回は新製品としてサンショウを入れたオオサンショウウオ・クッキーを開発されたそうです。いいですね！早速私は唐辛子入りを激辛で推薦したのですが・・・1辛2辛3辛・・・実現はいつに？

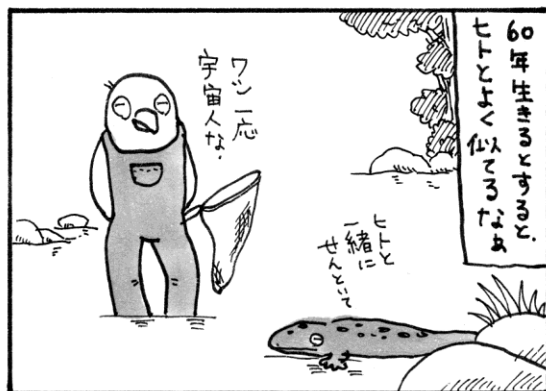
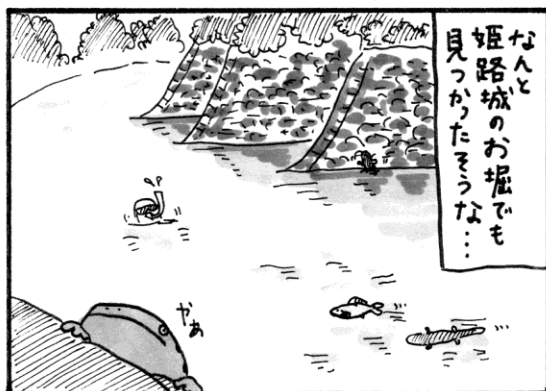
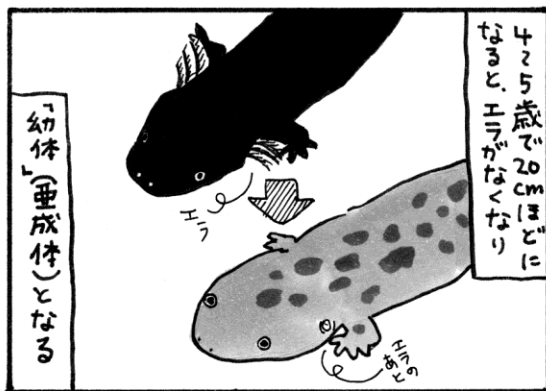
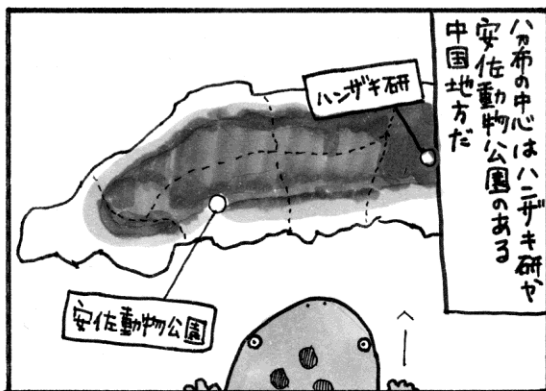
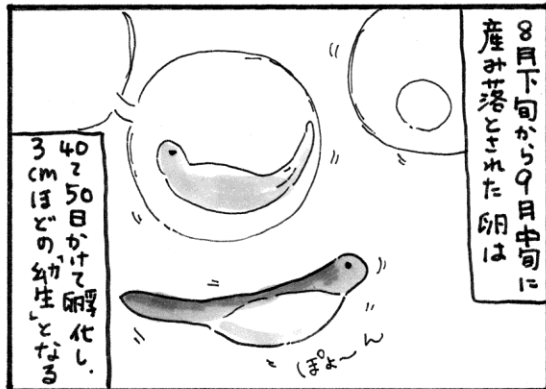




その15 分布 (日本)



その16 生活環



サン吉: オオサンショウウオ川にすく玉をたてある



トリ子: トリ型宇宙人地球を征服するべくお吉の生命をさくらっている

ハンザキ研日誌

2012年9月

- 1 日 大物谷（黒川本村にある支流）から水田に導水するパイプ内から腐乱死体
- 3 日 野鳥標識調査（脇坂秀弥夫妻ほか）
- 4 日 兵庫県自然環境課から工事指針とブラックリスト受増
- 5 日 岡田副理事長ほか水中カメラのテスト
- 6 日 ・上流の黒川ダムから放水があり濁水となる
・日本オオサンショウウオの会初代会長小原二郎博士死去
- 9 日 ・観察中の長野川の産卵巣穴の主を銚で突いた観光客あり
・4年ぶりに二枚目（の尾を持つ挑戦者）アンコ淵で測定
- 12 日 アンコ淵に 5 個体のハンザキ確認、繁殖集団！
- 13 日 ・田口勇輝会員、オーストラリア人（岡山在住）のショーンさんと夜間調査
・キノコ定期調査（横山了爾先生他）
- 14 日 アンコ淵で産卵があった様子（16日の観察で淵が静まっている）
- 15 日 動物学会にて一般公開講演会でハンザキの話（大阪大学にて）
- 17 日 アンコ淵の巣穴内の撮影成功
- 23 日 生野町最大の祭り“銀谷（かなや）まつり”に出展
- 25 日 赤色の強いマムシが生きのまま搬入、腹が大きく子供を持っているようだ
- 27 日 キノコ定期調査（横山先生他）」
- 28 日 日本オオサンショウウオの会山口県岩国市錦町大会へ
- 29 日 第9回日本オオサンショウウオの会開催（岩国市にて）
- 30 日 ・同上 錦川支流宇佐川で現地視察、やせ細ったハンザキが目立つ
・国の天然記念物岩国のシロヘビ見学

.....

ハンザキ所長のツブヤ記録

カモガワハンザキ（京都の賀茂川で多数個体が発見された日本と中国のハンザキの雑種で私が勝手に命名した）のルーツは不明だ。ただ40年前の日中国交回復に際して一儲けをたくらんだ人がいて、1トシ（800~1,300匹といういい加減な数字が報道されている）の中国ハンザキを輸入したという事実がある。各地のペットショップで売られたり、京都の料亭に卸していたりと報道されている。日本産と見分け難いハンザキを料理して客に提供していることが批判されたことで、こっそり大量？の中国ハンザキが捨てられたらしい。それが今では賀茂川で90%以上ものハイブリッドとして注目されている。中国の方ばかりに目が行っていたが、沖縄が日本に復帰したのも40年前のことである。今年は、沖縄の両生類グループの訪問を受けたが、第2陣も計画されているということだ。オスプレイだけでなく色々な問題が山積みの沖縄であるが、何とかならないものだろうか？